

旧県立博物館
中城御殿跡

沖縄県立埋蔵文化財センター 企画展

ふたつの中城御殿跡

開催期間：平成27年10月16日（金）－12月13日（日）

首里高校内
中城御殿跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

ごあいさつ

近世期と近代期にかけて、琉球にはふたつの中城御殿が存在していたことが分かっています。中城御殿とは、次の琉球国王となる世子が暮らした屋敷のことをいいます。

当初、中城御殿は17世紀前半に琉球国王の別邸である大美御殿の西側にある現在の首里高校敷地内（首里貞和志町）に創建されました。その後、明治3（1870）年11月に龍潭北側の沖縄県立博物館跡地（首里大明町）へ移転計画が立てられ、明治7（1874）年3月に竣工し、明治8（1875）年に移転が行われます。

しかし、明治12（1879）年の琉球処分の際には、国王尚泰は首里城から中城御殿に移り住み、明治18（1885）年の華族令により、家族とともに東京へ移り住むことになります。その後、主なき建物は沖縄戦によって昭和20（1945）年4月に破壊されました。

今回の企画展では、このふたつの中城御駿歴に焦点をあて、調査成果から両遺跡の特徴を比較しながら紹介を行います。展示では変遷をたどることで共通点や相違点を見出すとともに、往時の生活に思いをはせ、さらに首里城との関連性について考える機会となれば幸いです。

平成 27 年 10 月 16 日
沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 下地英輝

ごあいさつ

1.はじめに	1
2.調査に至る経緯・経過	1
3.遺跡の位置と環境	2
4.調査の概要と遺構	4
5.出土した遺物	8
6.おわりに	12

凡例

本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター平成27年度企画展「ふたつの城中御跡」(平成27年10月16日～12月13日)を補完する資料として作成しました。
原稿の執筆は、仲座久宣・山本正昭・羽方誠。鹿鳴憲書が小い、仲座が編集しました。本企画展及び本図録に使用した一部の図面・古写真は所蔵先の許可を得て掲載しております。図面や写真に提供者の名前を記しました。

1. はじめに - 中城御殿とは -

中城御殿とは、次の国王となる世子が生活および執務をとった施設を指します。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切を下賜され、「中城王子」あるいは「中城御殿」と称されたことによります。当初その建物は、17世紀前半に王府の別邸である大美御殿の西面に創建されました。

その後、中城御殿は明治元（1868）年に龍潭北側への移転計画が立案され、明治3（1870）年から5年間の工事を経て、明治8（1875）年に移転します。その後、明治12（1879）年の琉球処分の際、国王尚泰以下王家・王族は首里城から中城御殿に移り住みます。明治18（1885）年の華族令により、琉球王国最後の国王尚泰は華族に列せられ、家族とともに東京へ移り住みます。そして中城御殿の建造物は沖縄戦により昭和20（1945）年4月に破壊されました。

現在、この跡地が那覇市首里真和志町の首里高校内と、首里大中町の旧県立博物館跡地の2か所に存在しています。近年、この2か所の中城御殿跡において発掘調査が行われました。調査により、さまざまな石造遺構とともに、膨大な陶磁器類をはじめとする多様な遺物が出土し、注目を集めています。

今回の企画展では、このひつたの中城御殿跡に焦点をあて、発掘調査成果からみえる両遺跡の特徴を紹介することにより、その変遷や共通点・相違点を見出し、首里城との関連性について考えることを目的として開催します。

なお、本企画展では、それぞれの中城御殿を分けて紹介するため、「首里高校内中城御殿跡」、「旧県博中城御殿跡」として表記しています。

2. 調査に至る経緯・調査経過

首里高校内中城御殿跡の調査に至る経緯・経過

昭和55（1980）年に建てられた首里高校の校舎は老朽化が進んでいたので、平成23（2011）年5月、新校舎の建築工事がグラウンドで始まりました。工事を開始して間もなく、遺跡が残っていることがわかり、8月から12月にかけて那覇市教育委員会が試掘調査を行い、遺跡の範囲や深さを調べました。その結果をふまえて平成24（2012）年2月から3月、沖縄県教育庁文化財課が重機を使って現代の造成土を除去し、平成25（2013）年8月から平成27（2015）年2月にかけて、沖縄県立埋蔵文化財センターが遺跡の様子を記録するための調査を行いました。

旧県博中城御殿跡の調査に至る経緯・経過

旧県博中城御殿の発掘調査は、昭和63（1988）年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした遺構確認調査です。調査は平成19（2007）年度から今日まで、沖縄県土木建築部より予算を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施しています。

これまでの調査により、敷地内には多くの遺構が良好な状態で埋蔵されていることが判明しています。このような中、竣工当時の平面図（中城御殿御普請板図）を写した古写真が発見されました。これらの重要性から遺構は保存され、将来的に復元整備を行うことが取り決められました（平成24年1月）。現在は中城御殿跡地整備検討委員会（平成22年10月より開催）により、復元整備計画についての話し合いが行われています。

3. 遺跡の位置と環境

首里高校内中城御殿跡の地理的・歴史的環境

首里高校内中城御殿は、尚豊王代（在位 1621～1640 年）に、尚豊の次男であった尚文のために創建された屋敷です。創建された場所は綾門大道の北側、北に向かって緩やかに下る斜面地で、周囲には大美御殿、金武按司の屋敷、安国寺などがありました。現在、その場所は沖縄県立首里高等学校の敷地（那覇市首里真和志町 2 丁目）となっています。

1700 年代前半に作成された『首里古地図』によると、屋敷の周囲は石積みで囲われています。屋敷内には大小 15 棟の建物や区画の石積みがあり、建物の屋根には灰色の瓦が葺かれていたようです。

尚温 4（1798）年、国学（当時は公学校所）が仮設され、翌年に勘定座に移転、さらに尚温 7（1801）年に龍潭のほとりに移転しました。その後、国学は明治 13（1880）年に首里中学校、明治 20（1887）年に沖縄県尋常中学校と改称しました。

明治 3（1870）年に中城御殿が移転することが決まるときには、菜園が置かれ菜草の栽培が行われるようになりました。

明治 24（1891）年、龍潭のほとりにあった沖縄県尋常中学校が、屋敷跡に新築された校舎に移転し、明治 32（1899）年に沖縄県立中学校と改称しました。明治 44（1911）年、分校が沖縄県立第二中学校として独立したのに伴い、沖縄県立第一中学校と改称しました。

昭和 20（1945）年の沖縄戦で壊滅した学校は昭和 21（1946）年、糸満高等学校首里分校として再発足しました。その後も改称や組織改編を経て、昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立首里高等学校と改称しました。

旧県博中城御殿跡の地理的・歴史的環境

首里高校内に所在していた中城御殿は、明治元（1868）年に尚典王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小祿親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められました。工事は明治 3（1870）年 11 月に着工、明治 7（1874）年 3 月に竣工し、尚典は明治 8（1875）年に移転しました。

そして、明治 12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えます。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占拠されます。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王や王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住みますが、明治 18（1885）年には華族令により東京へ移転することになります。

その後、第二次世界大戦が始まると、御殿の一部は陸軍少佐の宿舎及び機関銃陣地として使用され、昭和 20（1945）年には戦災により焼失します。この破壊されるまでの間、御殿は尚家の屋敷（尚侯爵邸）として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされています。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のパラックが建ちますが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するため、琉球政府により買い上げられます。そして昭和 40（1965）年から翌年にかけ、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され、昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い、沖縄県立博物館に改称されます。その後、博物館は開館から 40 年が過ぎ、施設の老朽化及び収蔵機能の低下に伴い新館への移転が計画され、平成 18（2006）年 3 月に休館、平成 19（2007）年 3 月に閉館・移転し、建物は平成 21（2009）年の解体工事により撤去されました。

博物館移転後は、平成 19（2007）年度より跡地利用計画策定に先立つ遺構確認調査が行われた結果、遺構が敷地全面にわたり良好な状態で残ることが判明しました。これにより、平成 24（2012）年には現地保存されることが決まり、以降は復元整備を目的とした遺構確認調査を継続して実施しています。



中城御殿周辺の航空写真（国土地理院 2010年撮影 C11-12）

中城御殿関連年表

■：首里高校内中城御殿跡 ■：旧県立博物館中城御殿関連

西暦	元号	事項
1621～40年	慶長王代	高麗王代、中城御殿が奥羽立首里高校の際に建設される
1798年	嘉慶4・寛政10年	中城御殿内に公学校（国学）を開く
1801年	同慶7・弘和1年	国学が龍潭池近くに移転する
1806年	同慶6・文化五年	主事跡にて「中城御殿」に「料理動走櫻」が書きされる
1864年	同慶17・明治1年	高麗（のちの中城王子）が生まれる
1866年	同慶19・慶應2年	高麗王が冊封を下す
1868年	同慶21・明治1年	高麗が高麗王の世子となる
1870年	同慶23・明治3年	久米村の与儀親王とら3人が別州に派遣、風水を学ばせ中城御殿の風水看を行なう
1872年	同慶25・明治5年	中城御殿が龍潭池北側に新しく造営されることが決まる
1872年	同慶25・明治5年	琉球最高級官
1874年	同慶27・明治7年	久美川干渠を発廻し、中城旧殿の宅内にて改めて渠塗を開き、栽培を行う
1876年	同慶28・明治9年	琉球奉行や琉球奉行奉行をこの役所に配置
1879年	同慶32・明治12年	中城御殿跡1 中城王尚典公新築した屋敷に移る
1880年	明治13年	3月、鹿鳴館、首里城を切り替えて高麗王以下中城御殿に移る
1885年	明治18年	琉球置県に伴い、国学は県庁の所管となる
1887年	明治20年	東京師範学校から教員を招聘し、教則の認可を受け、首里中学校と改称
1899年	明治32年	5月、尚泰・尚泰とともに上京して東京駿町に屋敷を置き華族となる
1901年	明治34年	沖縄県立中学校と改称
1906年	明治39年	尚典親王立中学校と改称
1911年	明治44年	尚典親王立中学校と改称
1921年	大正10年	東宮御下（のちの昭和天皇）来訪ありた事前に大広間が洋間に改築される
1923年	大正12年	3月4日頃、東宮陛下が来島し中城御殿を訪問する
1934年	昭和9年	諱宮芦太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1939年	昭和14年	田邊泰（工学博士・古美術）が来訪する
1944年	昭和19年	日本民族協会の柳原悦・坂元万吉らが来訪する
1945年	昭和20年	第32回句文部省課題の長野義夫・少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する 10月10日・11日、米軍による空襲により泊前郡の資料が消失する（+・十空襲） 3月下旬、中城御殿の宝物を300万金箱へ移す 4月6日頃、中城御殿が米軍の爆撃をあびて炎上する 4月8日頃、火災をのがれて御殿後継（尚像堂）を御庭岩のうしろに移す 4月10日頃、日本軍が中城御殿や防空壕などを構築して陣地にする 首里の町並みとともに沖縄第一中学校も沖縄戦により壊滅する 戦後、一時引き落とし者のバラックが建つ 沖縄高等学校首里分校として発足 首里高等学校として独立
1946年	昭和21年	1月、首里市内別所が中城御殿跡に移転する
1950年	昭和25年	7月、首里市内バスが當麻所を龍潭池内に設置する（1966年まで）
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地を購入する（面積：11,246m ² 、金額：\$195,751） 6月、米民政府の援助により鉄筋コンクリートの博物館新館建築を起工 首里支所が当城へ移転、首里バス（1951年に民営化）が当城へ移転する
1966年	昭和41年	10月6日、龍潭池畔にあった琉球政府立博物館が移転・開館する 11月3日、龍潭池畔にあった琉球政府立博物館が移転・開館する
1972年	昭和47年	5月15日、日本復帰とともに「沖縄県立博物館」と改称する
1980年	昭和55年	創立100周年に應じて校舎を改築し、現貌に至る
2006年	平成18年	3月、中城御殿跡文化センターによる龍潭池跡修復が開始される
2007年	平成19年	中城御殿跡文化センターによる龍潭池跡修復が開始される
2011～12年	平成23～24年	那覇市教育委員会（扶助）、県教育文化財庫（造成土掘削、測量）
2012年	平成24年	遺構の周囲保護が決定する

4. 調査の概要と遺構

ふたつの中城御殿の調査により、御殿当時の石造遺構が多数出土しています。これらの遺構は、精緻且つ重厚に建造されており、首里城に引けをとりません。また、兩遺跡の調査では、御殿の増改築に関する遺構のほか、御殿建造以前の遺構も確認されており、土地の利用法を明かすとともに変遷を物語っています。

首里高校内中城御殿跡の遺構

首里高校内中城御殿の創建や施設に関する詳細な情報は、現時点で見つかっていません。1700年代に描かれた首里古地図などの断片的な情報を基にしながら発掘調査を進めた結果、多種多様な遺構が見つかりました。

石積みや井戸、洞穴遺構などの中城御殿当時の遺構が見つかるとともに、中城御殿創建に際し行われた大規模な土地整理及び造成の痕跡が確認できました。また、中城御殿が創建される以前の柱穴跡やゴミ捨て穴などが見つかり、中城御殿の創建以前からこの場所で人々が生活していたことが判明しました。



「首里古地図」と首里高校校舎配置の重ね図（沖縄県立図書館蔵「首里古地図」に加筆）

首里高校内中城御殿跡 調査区平面と主な遺構配置図



旧県博中城御殿跡の遺構

いしむらみ そごう さ だん

発掘調査により、中城御殿の石垣や側溝、基壇、ごみ穴、トイレなどの遺構が確認されています。また、御殿築造以前の遺構や造営に先立ち行われた大規模な造成の痕跡、さらには創建後の増改築の痕跡も確認され、当該地の変遷を物語っています。この御殿の遺構に関しては、創建時の間取りを示す「板絵図」や古写真、聞き取り調査等による情報から、建物の名称や機能を特定することが可能です。



米軍撮影航空写真（沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵）

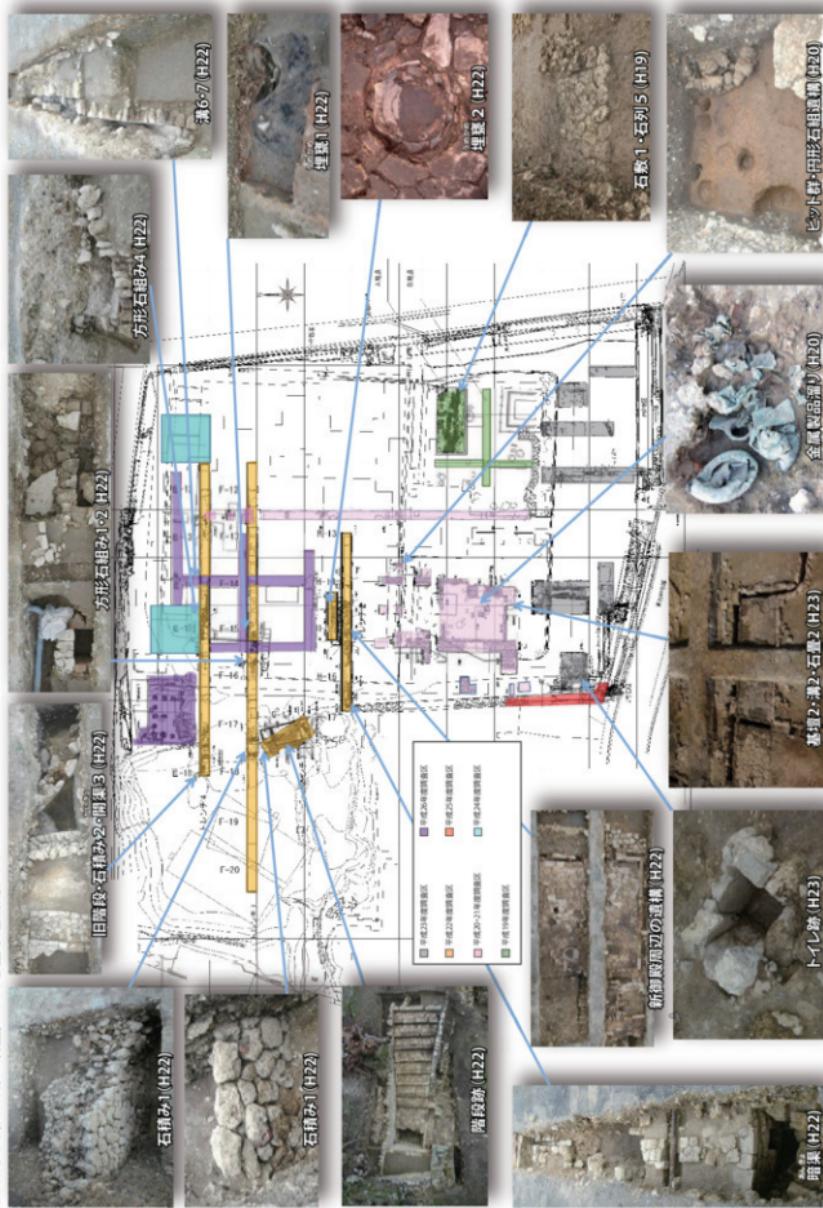
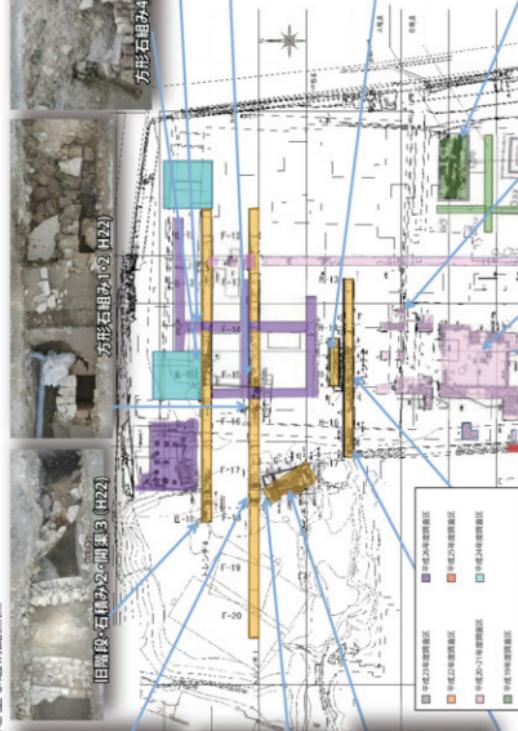


屋根伏図（沖縄県都市計画・モノレール課提供）



中城御殿御普請板図翻刻図（沖縄県都市計画・モノレール課提供）

旧県博中城御殿跡 調査区平面と主な遺構配図



5. 出土した遺物

ふたつの中城御殿発掘調査により、御殿で使用されたと思われる壮麗な陶磁器をはじめとする遺物や、創建前の遺物が多数出土しています。これらの種別や年代から土地の変遷を知ることができますとともに、格調高いくらしを想像することができます。次に遺跡ごとに主な出土遺物を紹介します。

首里高校内中城御殿跡の出土遺物

首里高校内中城御殿の出土遺物は、大きく3つの時期に分けられます。

中城御殿が創建される以前の時期の遺物【遺物1】には、中国産の陶磁器が多く見つかっています。この陶磁器と一緒にガラス製の器の破片が発見されており、県内でも類例のない資料となっています。

中城御殿当時の遺物【遺物2】が最も多く出土しており、御殿で使用された中国や東南アジア、本土産、沖縄産の陶器類、簪や銭貨などの金属製品、屋根に葺かれた瓦などがあります。中でも陶磁器がまとった状態で発見されており、今後の分析により当時どのような食器類を主に使用していたのかが明らかになるでしょう。

最も新しい時期の遺物【遺物3】は、中城御殿が移転した後の沖縄県立第一中学校や首里高校の遺物で、碗やガラス製のインク入れ、本土産陶磁器、沖縄産陶器が出土しています。

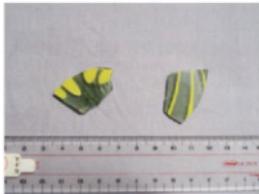
【遺物1】 中城御殿が創建される以前の遺物



ゴミ捨て穴出土遺物 集合写真



中城御殿が創建される以前のゴミ捨て穴



ゴミ捨て穴から出土したガラス製品

【遺物 2】 中城御殿当時の遺物



まとめて捨てられた食器類の集合写真



まとめて捨てられた食器類の出土状況

【遺物 3】 中城御殿が移転した後の遺物



ガラス製のインク入れ



本土産陶磁器



まとめて発見された硯

旧県博中城御殿跡の出土遺物

旧県博中城御殿の出土遺物は、大きく3時期に分けることができます。第1期は御殿築造前の遺物で、古くは15世紀頃から18・19世紀頃までの中国産、本土産陶磁器、沖縄産陶器などが出土しており、御殿築造前の暮らしを伝えています。

次の第2期は御殿創建後から昭和初期頃まで、御殿で使用された陶磁器類や金属製品、石製品、漆製品等の遺物が出土しています。中でも中国宮廷用に製造された陶磁器や、複数枚の削いで存在したと思われる肥前産の大皿や長皿、イギリス製の皿、王府用に特注したと思われる沖縄産の陶器、石製の器物類は贅沢の極みです。

また、窓の明かりとりとしてはめ込んだマドガイ製品や、調度品の飾り金具、青磁と染付の便器も出土しており、趣のある優美な建築を想像させます。

最後の第3期は、御殿が戦災により破壊される直前から終戦直後の時期を指します。全国各地で焼成された統制陶器などの戦時色の濃い遺物や、戦後のリサイクル品などが出土しており、そこから復興に向かってたくましく邁進する人々の姿がみてできます。

また、特殊な遺物として、戦時中に避難させたと思われる木製朱塗りの位牌が出土しています。

第1期（創建以前）の遺物



造成層（Ⅲ層）出土遺物

第2期（中城御殿当時の遺物）



新御殿周辺（Ⅱb層）出土遺物



肥前産色絵・染付皿・瓶



イギリス製陶器皿・鉢

第3期（戦中・戦後）の遺物



近代の陶磁器



戦中から終戦直後の遺物

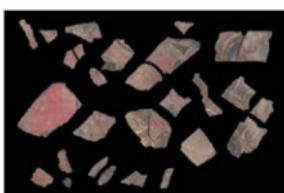
特殊遺物



大型金属製品集合写真



位牌



漆製品



石製容器



マドガイ製品

6. おわりに

構築時期や存続時期が異なるふたつの中城御殿跡ですが、首里王家の東宮として近世期と近代期とそれぞれ各時期に機能していました。いずれも琉球王国の重要な施設として位置付けられてきましたが、このふたつの中城御殿跡には共通点があることが、発掘調査した成果から見えてきました。その状況をまとめると次のようになります。

- 屋敷の範囲内に、井戸や水ため施設などの遺構が確認されている。
- 出土遺物の中では大量の陶磁器類が出土しており、稀少性の高いものも多く含まれている。
- ふたつの中城御殿跡からは石段、石畳が検出されているが、いずれも加工した石材を組み合せて構築されている。
- ふたつの中城御殿は共に構築される以前には屋敷や集落などの居住空間が存在していた。

この4点以外にも共通点がありますが、ここでは主なものを取り上げました。これから資料整理の中で更に明らかにしていく予定です。

その一方で、ふたつの中城御殿跡の違いも次のように挙げることができます。

- 旧県博中城御殿跡では、トイレ遺構が検出されているが、首里高校内中城御殿跡では、トイレに関する遺構が明確に検出されていないため、トイレのしかたが異なる。
- 旧県博中城御殿跡では、暗渠や溝などの排水に関する遺構が多くみつかっているが、首里高校内中城御殿跡では、これらの遺構が少なく、方形の石組遺構などの排水関連遺構が発見されているため排水方法が異なる可能性がある。
- 金属製品については鍍金、彫金された飾り金具が旧県博中城御殿跡からまとまって出土しているが、首里高校内中城御殿跡からの出土は少なく、移転の際に旧県博中城御殿跡へ持ち出したと考えられる。
- ふたつの中城御殿では、屋敷を建てるための造成が行われており、首里高校内中城御殿では段差を持つ、テラス状の屋敷配置が想定できるのに対し、旧県博中城御殿では段差を持たない平坦面に屋敷配置を行っている。

以上の4点は時期差や遺跡が立地する地形のちがいのほか、首里高校内中城御殿は移転によりなくなりますが、旧県博中城御殿は戦災により破壊されたという背景に起因すると考えられ、それぞれの中城御殿跡の特徴を表していると言えます。

今回の企画展で中城御殿の姿が発掘調査によって浮かび上がりましたが、まだまだ分からぬ部分が残されています。今後も引き続き調査により得られた成果を整理することに加え、文献資料の検証や古写真の詳細な解析をあわせることによって、より詳細な中城御殿の姿が描かれていくことでしょう。

〈参考文献〉

- 沖縄県都市計画・モノレール課 2010 「中城御殿跡地整備検討委員会資料」沖縄県都市計画・モノレール課
沖縄県立博物館 1993 『旧中城御殿石牆工事地域にかかる第一次発掘調査』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1994 『旧中城御殿旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1995 『旧中城御殿旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1996 『沖縄県立博物館 50年史』沖縄県立博物館
沖縄県立博物館 1992 『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館嘉手納宗徳 1970 「首里古地図」沖縄風土記刊行会
球陽研究会(編) 1974 「球陽」読み下し編 沖縄文化史料集成 5 角川書店
真栄平房敬 1975 「戦争と王家の宝物(上・下)」『沖縄タイムス』1975年11月25・26日 沖縄タイムス社
真栄平房敬 2003 「中城御殿の御道具について御道具と文書の保存と管理」尚家関係資料総合調査報告書II 美術工芸編
那覇市市民文化部歴史資料室
都築昌子 2005 「龍のひそむ島—近世琉球の風水—」『沖縄県史 各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 「中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(1)ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 「中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 「中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3)ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 「中城御殿跡ー県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(4)ー」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第67集 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2014 「首里高校内中城御殿跡現地説明会資料」沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 「発掘調査速報展 2015 その2」第63回文化講座資料 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター平成27年度企画展

「ふたつの中城御殿跡」

発行日: 2015(平成27)年10月16日

編集・発行: 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>

表紙写真

上…田県博中城御殿跡／階段跡 下…首里高校内中城御殿跡／水堀遺構

裏表紙写真

- ① 金属製耳杯(田県博中城御殿跡出土)
② プラスチック杯(首里高校内中城御殿跡出土)
③ 陶器製土器入れ(首里高校内中城御殿跡出土)
④ 金葉製座、襷の引き手(田県博中城御殿跡出土)



沖縄県立埋蔵文化財センター ◆行事予定◆

関連文化講座

第 64 回文化講座 & ギャラリートーク

日 時：平成 27 年 10 月 24 日 [土] 13:30 ~ 15:30 文化講座(13:00 開場)

15:45 ~ 16:45 ギャラリートーク

会 場：当センター 研修室 及び 企画展示室

内 容：文化講座 ※定員 140 名

「首里高校内中城御殿跡の調査成果」講師：亀島慎吾（当センター職員）

「旧県博中城御殿跡の調査成果」 講師：山本正昭（当センター職員）

ギャラリートーク（展示資料解説会）※定員 60 名

講師：当センター職員

予約等不要
参加無料

次回の催し

企画展 ◆重要文化財公開「首里城京の内跡出土品展」◆

日 時：平成 28 年 2 月 23 日（火）～ 5 月 15 日（日）

会 場：当センター企画展示室

※関連イベントを企画中です。詳細が決まりましたら、当センターホームページやマスコミを通じて広報いたします。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751

FAX 098-835-8754

H P <http://www.pref.okinawa.jp/edu> 入場無料

開所時間：午前 9 時～午後 5 時（入所は午後 4 時 30 分まで）

休 所：毎週月曜日、年末年始

国交祝日（こどもの日、文化の日を除く）、懇謹の日（6 月 23 日）

※月曜日が祝日となった時は、翌日の火曜日も休所

その他、臨時休所あり

交 通：沖縄自動車道西原 IC より車で約 10 分
市外線バスターミナル発那覇バス 97 番「東大路園芸商店」下車徒歩 3 分